



たかもりとうだゆう 藤方と鷹森藤太夫の碑

津市街地から国道23号を南に進み、垂水南交差点で旧伊勢街道を横切ると、右手に藤水小学校が見えてきます。

藤水小学校のある藤方は、かつて「藤潟」と記されていたことから分かるように、一部分が海であったようです。平安時代に藤方を通った貴族が書いた「春記」という日記には、その景色は大変優美で言葉で言い尽くせるものではないと記されています。また、中世には安濃津と呼ばれる湊であったとも、干潟が広がっていたともいわれています。

その後付近は次第に水田に変わっていきます。特に江戸時代には新田開発によって、水田が増えて米の収穫量も増加しました。その開発の功労者として知られている鷹森藤太夫の石碑が藤水小学校の敷地内にあります。

石碑は高さ40cmほどの自然石で少し前に傾いています。石碑に刻まれた文字は細く摩滅していて今はほとんど読めませんが、以前の調査で正面に「鷹森藤太夫碑」、向かって右側に文字を書いた人の名前と思われる「杲(堂)」、左側に「昭和二十八年」と刻まれていたことが分かっています。

津藩の役人であった藤太夫は、代官役や南勢奉行を務め、のちに郡奉行となった人物です。雲出川北岸や相川の河口一帯の干拓を三代目藩主藤堂高久に進言した藤太夫は元禄5(1692)年にその大工事に取り掛かりました。

翌年に工事が完了すると、雲出本郷や長常集落の北側に約114町歩(約113万㎡)もの新たな水田が造られ、長浜新田と名付けられました。その後、相川の北岸に米津堤防を築き、藤方にも

約20町歩(約20万㎡)の新田を完成させたといわれています。

昭和28年に藤水小学校の児童が行った郷土研究の結果をまとめた「開けゆく郷土」では、雲出川流域のみならず安濃川流域の南河路の堤防見守り役なども務めた藤太夫を、津市の治水の恩人として紹介しています。また、当時の児童会で藤太夫の顕彰活動を行う機運が盛り上がっていたことも記されています。

石碑はその機運の盛り上がりの中で設置されたものでしょう。小さな石碑は、今も校庭の片隅から東の堤防の方を向いてひっそりと佇んでいます。



※見学する場合は藤水小学校職員室に声を掛けてください。